

2016年8月号では、「社会の要請に応える理学療法教育」の特集を組んだ。本特集では、さらに多様なニーズに基づくキャリアパスを踏まえた卒後の学習を豊かに継続するための生涯学習として、卒前教育との一貫した連動と発展性について現状と展望について整理することにした。

■卒前教育と生涯学習の連動と発展性—魅力ある理学療法教育と生涯継続学習(内山 靖論文)

社会の急速かつ急激な変革のなかで、理学療法士に求められる態度や技術ならびに必要な知識も変化している。本論では、わが国の大きな方向性を概観し、社会に求められる理学療法とそれを学ぶ者のニーズを満たす生涯学習のあり方について、卒前教育を担う教育機関や学協会の役割を含めて示した。

■世界の生涯学習制度にみる生涯学習の課題と展望(高橋哲也, 他論文)

自らを「結果の出せる理学療法士」と称してみても社会からの認知が得られなければ、それは単に「自称」にしか過ぎない。愚直に生涯学習を続け、社会が求める質の高い理学療法士であるとの認定を第三者機関から受けることが重要である。学び続けることはプロフェッショナルとしての責任である。国内の医学教育や米国の生涯学習制度から、日本の理学療法士の生涯学習のあるべき姿を概観することができる。

■理学療法における生涯学習の展開—医療機関での取り組み

1. 生涯学習システムの構築と課題(青山 誠論文)

採用試験で優秀な人材を獲得し、成熟したラダーのもとで優秀な管理職の段階的育成や、育成された管理職による指導のもとでスタッフの臨床能力や管理能力の向上を図るシステムを構築することは、生涯学習の展開上必要不可欠である。しかし、このような育成システムの構築だけでは不十分であり、スタッフを公平・公正に評価する人事考課と、その結果を給与や役職などに反映させるシステムの構築も重要な課題である。この2つのシステム構築と適正な運営こそが、管理責任者に課せられた使命である。

2. ローテーション教育を基盤とした人材育成(村永信吾論文)

今日の医療現場は、診療効率増大、時間外削減、大量採用、指導者不足、365日体制による監視不足など多くの課題が山積している。これらの課題をクリアする一方で質の向上や組織成長への取り組みが求められている。本稿では亀田メディカルセンターで取り組んでいるスキルチェック表の活用やローテーション教育といった基礎教育と、研究発表会などの専門教育への取り組みへの意義について解説し、地域中核病院としての地域でつくる教育研修体制に触れる。

3. 生涯学習におけるコンピテンスの涵養(福迫 剛論文)

卒前教育は、アクティブ・ラーニングという視点で学内教育と学外で行われる臨床実習教育が連動して行われることが重要である。卒後教育は、新人だけでなく、中堅・管理者にも必要で、生涯学習を継続することで理学療法に必要なコンピテンスを涵養することができる。急性期、回復期、生活期の各施設間の顔の見える連携が予後予測や目標設定能力を獲得することに役立ち、質の高い理学療法を提供するための生涯学習の一助となる。

■理学療法における生涯学習の展開—教育機関での取り組み

1. 基礎医学的研究を通した生涯学習の展開(沖田 実論文)

教育機関には卒前教育のみならず、卒業生をはじめとした地域の理学療法士の生涯学習を支援する役割があると認識している。筆者が主宰している研究室では全国的にも珍しい基礎医学的研究を通した生涯学習を展開しているが、その実践においては地域の卒後研修関連施設との連携が不可欠である。本稿ではこの生涯学習の時系列的な流れを紹介するとともに、その意義について述べる。

2. 生涯学習への連動を意識した卒前教育と大学院高度専門職業人プログラムの紹介(大西秀明論文)

学生の知的好奇心を刺激し、積極的に学術活動に参加したいと思う精神や生涯を通して学習しようとする意欲、課題発見・解決能力などを涵養することを目的とした卒前教育(卒業研究、社会貢献活動、国際交流活動、連携教育など)と、高度専門職業人の育成をめざした大学院教育プログラム「急性期理学療法コース(神戸市立医療センター中央市民病院との連携プログラム)」について、新潟医療福祉大学での取り組みを紹介する。

3. 群馬大学大学院の現状と課題(白田 滋論文)

本学大学院の学生の多くは社会人であり、所属施設での日常業務と並行して、大学院での学習や研究を遂行できるよう、カリキュラムの工夫や学習資源の利用、特別研究に関する個別指導など、さまざまな支援を行なっている。所属施設や地域での活動と連動して大学院を利用することで、効果的な生涯学習の展開が期待される。

■座談会：理学療法における生涯学習—卒前教育との連動と発展性

(内山 靖, 金谷さとみ, 藤澤宏幸, 吉井智晴, 松葉好子)

社会に求められる専門職としての質を高めるため、また何よりも患者や利用者の方々によりよい理学療法を提供していくためには、卒前教育との連動を図った生涯学習の環境整備が喫緊の課題である。少子高齢社会の到来や科学技術の革新など、さまざまな変化への対応が求められるなか、どのように卒前・卒後の学習の有機的なつながりを生み出し、発展させていくことができるのか。臨床、教育、地域で活躍する先生方に語り合っていたいただいた。